

『武家諫忍記』の創作動機と思想基盤について

——『可笑記』『可笑記評判』の影響から——

島田 佳香

はじめに——本稿の目的と方法

筆者は、本研究の最終的な目的として、「大名評判記」の主題形成（注一）を考察したいと思っている。その上で、「大名評判記」の内容と藩政、あるいは幕府の状況を絡めて考察し直すことで、より立体的な史実に迫れるのではないかと期待するからである。

前述した問題を解決するために、二つの視点により考察する必要があると考えている。

一つは、『武家諫忍記』『武家勸懲記』等諸本の比較から導き出される、「主題」の類似あるいは相違である。これにより、字面の上での物理的比較とは異なる形で、「大名評判記」として総称される諸本の性質の違いに光を当てることができるとも考えられない。二つめは、書き手側の主張や評価、使用される文言等の影響関係を考えることである。これらを積み重ねていくことで、「大名評判記」とは何か、という根本的問題に言及することができるかもしれない。

本稿では、さしあたって二つめの加賀大聖寺本『武家諫忍記』（注二）を対象とし、如備子『可笑記』、浅井了意『可笑記評判』との影響関係を考察する。また、「大名評判記」に、フォーマット他の点で影響を与えたと考えられる『堪忍記』（注三）は、深沢秋男氏等により如備子の作ではないかと推定されている（注四）。その真偽を、内閣文庫本『堪忍記』「序」と『可笑記』を比較することで確認してみたい。

以上のような視点により、『武家諫忍記』の書き手の創作動機と思想基盤を追ってみよう。

（注一）本論文では、「主題形成」という言葉を使用する。当初は「表題」という角度からその変遷の意義を追跡するという目標を掲げていた。しかし、「表題」はその本の

主義主張を最終的に表徴するものであっても、「主題」を適確に提示する視角とは必ずしもならない。「表題」に特化することで見落とされる「主題」をないがしろにして議論を進めても、それは空虚なものとしかならないであろう。そこで筆者は、本書の本質に迫っていくためには、「表題」の意味と推移という問題も含めた上で、「序」「教法の巻」や数多くの「評」等にまつわる基準・価値観を整理して、「主題」という根幹の形成を考察していく必要があると考える。

（注二）加賀市立図書館整備文庫蔵、二二冊。

（注三）松平文庫蔵一冊と、内閣文庫蔵・和学講談所本、同蔵・昌平坂学問所本が存在する。

（注四）深沢「如備子の『堪忍記』（一）」——松平文庫本の翻刻と解題——（近世初期文芸研究会『近世初期文芸』第六号、平成元年）、「如備子の『堪忍記』（二）」——内閣文庫本の翻刻と解題——（近世初期文芸研究会『近世初期文芸』第八号、平成三年）

・松平文庫・内閣文庫本『堪忍記』は本当に如備子作か
——『可笑記』との比較で考える——

『可笑記』『可笑記評判』との比較に入る前に、題名やフォーマットの点で『武家諫忍記』諸本と関連が想像される『堪忍記』に注目したい。

最初に深沢氏の研究を参考に、その特徴をまとめておく。

松平文庫本『堪忍記』、内閣文庫本・和学講談所本『堪忍記』、同・昌平坂学問所『堪忍記』は、三本とも一冊のみで構成され、後者の内閣文庫二本は「序」が付されている。松平文庫本の主な評価基準概念は、「物成」「米払いの良否」「年貢率」「国役」「江戸詰の良否」「家中の風儀」「主人の善悪」等である。後者の二本は、「知行高」「姓名」「官位」「御前」「子息」「家紋・旗印」「領国・居城」「物成」「米払いの良否」「年貢率」「国役」「江戸詰の良否」「家中の跡日取り立ての有無」「家中の風儀」「主君の善悪」「江戸屋敷」「家老の姓名」等の項目がみられる。つまり単純に考えても、前者に対し、後者の二本は評価基準を付加していると考えられる。

内容をさらに詳細にみていくと、後者二本では「天下せまく（せはし）」（括弧内は昌平坂学問所本）や「上下ノ間情ふかし」「せはしき家」「たゝすみ吉」等ほぼ同様の言葉により評せられる。また、松平文庫本にあって内閣文庫本に無い藩主、対し内閣文庫本にあって松平文庫本にない藩主という相違点はそれぞれ存在するが、藩主名の順番や評もほぼ同様である。これらのことから、前者が後者に先行して存在し、両者がおそらく同じデータを基に著述され、なおかつ後者は前者をさらに詳細にしたものという位置付けが導き出されるであろう。

次に後者の内閣文庫本二本について確認したい。まず深沢氏は「講談所本と学問所本は紙数も行数も字詰もほとんど同じ」であることから「両者は非常に近い本文」であることに留意する。その上で、講談所本には比較的誤りが多いこと、それが「著者自身が書いた場合、生じ得ないもの」であるとし、著者の自筆本ではなく転写本であることを推定した。学問所本についても同様とする。さらに「学問所本が講談所本を写し、または、講談所本が学問所本を写した」可能性を否定している。なお、本書を如備子作と断定する証拠は見つかっていないと思われる。

(1) 君臣関係

「それ侍ハ、高下によらず、立身の心懸不_レ宜_ハ（不_レ宜_ハ）ハめづらしからず。たゞ常に御情ふかく、万御仕置（仕置）正路にましますこそ、御身のためもよけれ。しかれども、まつたいていは堪忍也。よき御あてかきを、よろしき御主と申候。ケ様ニ申せはよくニふけるにて候へ共、又さ様（左様）にても御座なく候。たとへハ、上たる上よりよろしき御あてかき、何にても不斗御拝領候は、何程か満足ニ可被思召候。其御満足は、欲にふけたる御満そくに有間敷候。たゞありかたくとうとく忝、御まんそく可有（在）候。又あしき事の御迷惑も、心持同前にて候。上二にくむ所、下につかふまつる事なかれ。其上よりなし下る善悪を御身に思召あてられ、御なさけふかゝるへし。」

これは『堪忍記』の「序」の冒頭であるが、神道思想の強い影響を受けている『武家諫忍記』とは全く異なる。また、かな使いが非常に多いことも特徴である。「まつたいていは堪忍也。よき御あてかきを、よろしき御主と申候。」という一文からは、俸禄目当ての主従関係を肯定する考え方が見受けられる。このような考え方は、仮名草子『清水物語』や軍記『豊内記』等にも共通するという（注）。

一方で、『可笑記』では主従関係をどのようにとらえているのであろうか。

例えば、

むかしさる人の云るハ人の主君としてハ、少なりとも、忠功あらん、さふらひにハ、はやく気をつけ、それ／＼に、何成とも、くだされ、其侍の心をよるこぼしめ給ふへし。さあれは、わき／＼の侍も、此よしをミて、あれつれの事にさへ、御気を付給ふ間、いはんや、思ふさま、でかいたらハ、おんしやう、あつく、あづからん、と、我もくと、たしなミ心がけ、いさミすゝミ申候間、すぐれたる大忠大功の侍共、おほく、出来する、又、少の事に、御気を付、詞のなさけにも、あづからされば、諸侍の気もうかずして、

忠功立申さぬ也。（二一三〇）

如備子は、主君は「少なりとも、忠功あらん、さふらひにハ、はやく気をつけ、それ／＼に、何成とも、くだされ、其侍の心をよるこぼしめ」なければならぬ、そうすると、「わき／＼の侍」も「おんしやう、あつく、あづからん、と、我もくと、たしなミ心がけ、いさミすゝ」むので、「すぐれたる大忠大功の侍共、おほく、出来する」と述べる。ここでは、恩賞や俸禄により繋がる君臣関係を前提にして、主君がまず忠功を立てた臣に「何成とも」与えることで良好な関係が結ばれる。結果的に、臣下の侍は多くの優れた忠臣となると主張しているのである。寺谷氏は、このような如備子の考えを「戦国時代の主従観」と断るのであるが、『堪忍記』も「堪忍」つまり「宛行扶持」を題目とするごとく、このような関係をいわば「常識」としていたといえよう。

（注）寺谷隆「假名草紙に於ける庶民教化の一断面」『國語國文』第二十三卷、第三号

(2) 御世の風儀

『堪忍記』「序」に戻ると、「当世」では、「ばかなるものも、御氣ニ入り（いり）、家の頭をするものなり。是ハ主人の御ひかりにて、立まハリも能様ニ見ゆる。たとへは、ともあれかくもあれ、ちとふりなとよき小姓とてめてたるほれものゝ、若うきすきとハ申ながら、御吟味おろかニ見へ（見え）、主人の御心のほとこそ、とおもひやられ候。」とし、「御世の風義（風儀）」では、「おしたてよく口よく、しかもよいころ、うそなとつき、けいはくもの、へつらいもの、てくるうもの、おりふしやりこめられてもよくこたへて、おとなしく物をやふらぬもの」を「江戸公儀おとな可然なとて、加増被遣御ミたてニ」与り、逆に「侍の作法として、へつらう事なく、てくるうせず、正直なる侍ハ、もきどうものなととりなし」主に気に入られないと、批判するのである。

では、如備子は「当世」の武士をどのように著しているのだろうか。

昔さる人の云るハ漢書といふ物の本に

小盗ハ誅せられ、大盗ハ侯たり

と書たり。（中略）大盗とハ、国家をかたふけ、天下をも、ミださんとする悪人共の事、これを大ぬす人といふ。侯たりとハ、高き位に昇、大名になり、栄花にほこる事也。されは、大ぬす人として、いかでか、大名になり、高き位にのぼり、栄花にハほこるぞ、と、云に、此大ぬす人と云ハ、其家／＼老、

出頭、奉行、役人等を云（中略）どうよく不道の老、出頭、奉行、役人ハ、
国家をかたふけ、天下をも、ミださんとする、むほん反逆の大悪人と同事な
らずや、さりながら、しりぞいて、つくくと案ずるに、国家治乱の根本ハ、
たゞ主君の善悪に、よるべし。いかんと云に、主君、仁義をわきまへ、しり
給ひて、善人をめきし、それくくのやくに、めしつかハれ候ハ、上に大
ぬす人なく、下に小ぬす人あるべからず、責、一人にきす、と、なれば、お
それつゝし給ふべき事（二―28）

「大ぬす人」として国を盗つた候は、大名になり栄花を誇れば、今度はその下
の「其
家ノ老、出頭、奉行、役人等」が「大ぬす人」として金銀・米銭等万の物を貪
るようになるという。そして、その責任は、あくまで主君「一人にきす」とい
のである。

また、次のようにも記している。

むかしさる人の、いへるハ、今時の人く。あれハ、利発才覚あるよき人よ、
と、ほめ給ふを、見きくに、みな、けい薄、表裡、佞心、どうよく者共也。
そのいはれハ、まづ、その家の老、出頭衆の言行に、したがつて、それく
に、気をつけ雲井にほめあげ、おもしろくも、をかしくもなき事を、笑、ほ
うびし、其間にハ、侍百姓町人をむさぼり（略）（三―38）。

（3）小括

『堪忍記』『序』と『可笑記』の説は、確かに似ており、「序」の後半において、
「先今時入札を以て御徳のおきかたへ付へしと相究、おもひくの入札、先今
時分入さるものハ侍也。知行とらせてついへニて候。御為おもひのもの共斗を残
シ置、其外ハ扶持はなす入札。又百姓しほりとる入札ハ色々あり。」とあるように、
『可笑記』の（二―3）においても入札を話題にしている点等々で、二書には多
くの共通性がみられる。

しかし、深沢氏も指摘しているように、重要な機密事項であつたと推測される「知
行高」「物成」「米払いの良否」「年貢率」等を、一窄人が収集しえることは大きな
疑問である。

とすれば、作爲的に如儡子の筆致に似せて、「窄人」による書として責任転嫁し
つつ、機密事項の伝達、あるいは暴露に使用された可能性が大きいと考えるのが
自然ではないだろうか。

・聖藩本『武家諫忍記』の主題形成と『可笑記』および『可笑記評判』

「表1」では、寛永十九年本『可笑記』と万治三年刊本『可笑記評判』を使用
（注一）し、『可笑記』が『可笑記評判』において、どの程度評論対象とされてい
るかを把握するために対照表を作成した。

表を一見すると、『可笑記』の項目数はかなり多いが、了意がほぼ全体を網羅す
る形でそれら個々に「評」を加えているということが確認できる。なお、了意が
「評」を加えていないものは、後半になるに従つて増加し、歌・連歌関係のもの、
笑い話や下品な話、武士に関する話題でも重複しているもの、等であると考えら
れる。了意がやはり紙幅を大幅に割いているのは、「侍」や「主君」「聖賢」等の
話題である。

『可笑記』『可笑記評判』の意見として一致している点を、若干挙げておきたい。
まず、「二―13」「三―第13」「方に堪忍すへき事」、「二―23」「三―第21」
「諸侍、つね々、心得へき事」（『可笑記』で遠慮と堪忍の重要性について）「三
―2」「五―第2」「諸侍の宝ハ諸侍なる事」（『可笑記評判』の「評」に、『武家諫
忍記』の「序」の秀頼ハ愚者とし、多くの士卒が犠牲になつたとする歴史観に相
当する部分有）等・・・の主張が、加賀大聖寺本『武家諫忍記』の共通項として
挙げられる。つまり加賀大聖寺本『武家諫忍記』は加賀大聖寺本『可笑記評判』
を通して、如儡子の『可笑記』と浅井了意の『可笑記評判』の両方に創作動機と
思想基盤を与えられている可能性が大きいといえる。

（注一）前者は、朝倉治彦編『仮名草子集成』（東京堂出版）十四巻、後者は 同シリーズ
十五・十六巻に収録されている。

おわりに――聖藩文庫本『可笑記評判』

『聖藩文庫目録』（注一）をみると、「時習館書目」の中に、浅井了意の著作と
しては、『堪忍記巻』八冊、『可笑記評判』十冊が蔵本されているのが分かる。後
述するように、聖藩文庫本『武家諫忍記』は、創作の動機付け上で『可笑記』と
『可笑記評判』が大きな役割を果たしていると、聖藩文庫本『可笑記評判』
を読解する必要がある。これも今後の課題としたい。

（注一）矢野貫一他編、加賀市立図書館、一九八七年。

〔表1〕如備子『可笑記』と浅井了意『可笑記評判』の対照表 ※『可笑記』は五巻五冊寛永十九年板十一行本、『可笑記評判』は十巻十冊万治三年刊本を使用

番号	『可笑記』	番号	『可笑記評判』
一-1	「むかしさる人の云るハ永祿つちのとの巳年～」	一-第1	突感星の出たることを聞つたへて、この書を作りし事
一-2	「ハ 穀梁伝と云物の本に、厚孝の子ハ～」	一-第2	忠節の侍ハ、主君の悪事を沙汰すまじき事
一-3	「ハ 皆、人毎に、後悔すへき事有」	一-第3	物ごと、後悔すべき事
一-4	「むかし 人の心ハ、万えんにひかれて～」	一-第4	心ハ万の縁にひかる、事
一-5	「ハ もろこの楚國のかたハらに、さるもの～」	一-第5	つれなき女を、妻とせしたとへの事
一-6	「むかしさる人の云るハつねに、したしみ～」	一-第6	善友、悪き友の事
一-7	「ハ 陸奥の住人鳥川瀬兵衛と云さふらひ～」	一-第7	先がけの、高名秀歌の事 ※評無し
一-8	「ハ 人と成て、富貴をねがひもとめざる者ハ～」	一-第8	富貴に成べき分別の事
一-9	「むかしもろこしに、五柳先生といへる人、山居して」	一-第9	五柳先生、白臙をはなせし事
一-10	「むかしさる人の云るハ大身、小身、ふつきなる人～」	一-第10	子をそだつるにハ、守を詮にすへき事
一-11	「ハ 牛ハ、心ぐちにして、つのあるゆへに～」	一-第11	藝能にたかぶるまじき事
一-12	「ハ 世間の人々、我こそ、たけがひくい、色がくろい」	一-第12	身の長ひきく、かたちのよし醜を、歎くまじき事
一-13	「ハ かせんに、かつべき大事の日どり、大風大雨～」	一-第13	軍陣の日取の事
一-14	「ハ そも、世中のはかなき事を思へハ、身のをき所」	一-第14	世の無常の事 ※評無し
一-15	「ハ 大聖孔子のをしへに、父母を持たる人ハ、遊山」	一-第15	父母に遠ざかり、あそぶべからずといふ事
一-16	「むかしある人のいへるハされば、人ハ人の真似を」	一-第16	身のふるまひ、分際に通べからずといふ事
一-17	「ハ 一日、やぶれあみがさ、ひきこみわか衆がぶきを」	一-第17	見物の場に、人にをされて、堪忍せし事
一-18	「ハ 我、一とせ、若かりし時、思ひもよらぬ人を～」	一-第18	恋より、身の上を思ひしりたる事
一-19	「むかしさる人の云るハ浄土の万随心上人と～」	一-第19	万随意と禅僧と問答の事
一-20	「むかしある人の云るハさる御大名、ことの外～」	一-第20	家老の分別にて、悪き主君をよくなす事
一-21	「むかし人のいへるハされば、嫉欲の道ほど～」	一-第21	愛欲ハ切難き事
一-22	「むかしさる人の云るハもろこし宋といふ國に、あたひ」	一-第22	君子ハ宝を好さる事
一-23	「むかし何とやらん云人の、よめる哥とて～」	一-第23	剛ハ柔らかなるに負るといふ事
一-24	「むかしさる人のもとに、人ハ寄合、暮をうてり～」	一-第24	暮をうちて、他念をわするゝ人の事
一-25	「さる人の云るハさるかたにて、さる書をみるに～」	一-第25	鯉を食する事付鰓等を食事
一-26	「むかしさる人の云るハげらうの詞に、苦瓢にも～」	一-第26	物ごとに、とりえある事
一-27	「むかしある、わかき人あり、立居しづかに～」	一-第27	父母孝行のために、我身をまもる事
一-28	「昔さる人の云るハ漢書といふ物の本に」	二-第1	天下國家の、大盗小盗といふ事
一-29	「むかし日蓮浄土の中、悪〔両〕宗のだんな二人～」	二-第2	法花浄土、二宗の檀那、いさかひの事
一-30	「むかしさる人の詩に」	二-第3	善人にしたしみ、まじはるへき事
一-31	「むかしある人の云るハさふらひに、四つの病あり」	二-第4	侍に四の病ある事
一-32	「むかしさる人の云るハそれ、侍の善悪ハ、ひとへに」		
一-33	「むかしさるかたに、病人あり、にわか、怨身かゆく」	二-第5	風の生病の事
一-34	「むかしある人の云るハもろこしの名医、扁鵲、河間」	二-第6	妄念のみなもとをしるといふ事
一-35	「昔去人の云るハ世間(の)万民、高きも、いやしきも」	二-第7	痴福ハ三生の怨といふ事
一-36	「むかしさる人の云るハ夫、人の心ハ、はかりの～」	二-第8	人の心を權にたどへし事義経、軍法の哥の事
一-37	「むかし源九郎よつね公の御哥とて、吟するを～」	二-第9	義経、軍法の哥の事
一-38	「むかしさる人の云るハ冬の夜のつれいと、寒けさに」	二-第10	乾坤充滿の火の事
一-39	「むかしある人の云るハ」	二-第11	花の盛、くまなき月を、見バやといふ事
一-40	「昔ある人の云るハ一とせ、浄土の上人～」	二-第12	六字の名号をよみし、恋の哥の事 ※評無し
一-41	「むかしさる人のいへるハもろこしにて、虎、狐を～」	二-第13	狐ハ、虎の威をかる、たとへの事
一-42	「むかしさる人の云るハをのれが心にハ～」	二-第14	我はよき事と思へとも、余所め突止なる事
一-43	「むかしある方に、小身なる侍二人あり、独ハ数奇者」	二-第15	茶の湯をいましめたる事
一-44	「むかしさる人の云るハ万事ミな、少の事～」	二-第16	万事、小より大になる事
一-45	「ハ 人の主君ハ、万ミな、家の老出頭人に～」	二-第17	万事の政道を、老出頭に任せられまじき事
一-46	「ハ 世間いつれの御家にも、おため者といふ～」	二-第18	諸家に、おためしやと云曲者ある事
一-47	「昔さる人、諸奉公人の心得べき哥也、と詠する～」	二-第19	諸奉公人、心得べき哥の事 ※評無し
一-48	「むかし去人の云るハ人ハ、たゞ、万、少の事に心を」	二-第20	小事を慎まざれば、大事となる事
二-1	「むかし越王勾踐、呉王とかつせんの時、さる人～」	三-第1	大將軍陣中に酒を給ハる事
二-2	「むかしさるところに、萬のかづらの介といへる人あり」	三-第2	萬のかづらの介が事 ※評無し
二-3	「むかしさるくにあるじ、れいけんあらたに～」	三-第3	入札の事
二-4	「むかしさる人のいへるハ唐の事ハかくべつ～」	三-第4	君子小人の事
二-5	「ハ たとへバ、何事成共、法度にさだめをく時～」	三-第5	法度をそむく罪科に軽重ある事
二-6	「ハ それ、人の主君として、ミうちの者に、万物を～」	三-第6	知行恩賞を与る心得の事
二-7	「むかしさる傍に、すこびたる人あり」	三-第7	人にまじはる道に本反ある事
二-8	「むかしさる人のいへるハそも、一騎をも吟する侍～」	三-第8	家居の作りやうの事
二-9	「ハ 人ハ、たゞ、我心をあきらめ、行儀詞を～」	三-第9	我心をあきらめ、行儀正しくすべき事
二-10	「むかしさる人むすめのかり、異見の狂哥をつらねて」	三-第10	女の身のもちの哥の事 ※評無し
二-11	「ハ ふくたう汁のおれり、しんしやくなしに～」	三-第11	河豚並に茸の毒酒の菓の事
二-12	「むかし中秋の夕のけしき、ひやよかにして～」	三-第12	秋の夜の月の哥の事 ※評無し
二-13	「ハ から國の妻師徳と云人、子をみるたび毎に～」	三-第13	万に堪忍すへき事
二-14	「むかし武州江戸の御城にて、四座のさるがくども～」	三-第14	猿楽の能を、名もしらてほめし事
二-15	「ハ 唐の明州に、陽東(棠)谷といへる賢人あり」		
二-16	「ハ それがしの親の、申されしハ相たがひに～」	三-第15	人の交ハリ難疎ハ、心だてによる事 ※評無し
二-17	「むかしさる人の云るハそれ、天下に、たから、およく」	三-第16	四民ハ國家のたから成事
二-18	「ハ それ、世間に、主君、おほくは、ミ内の者共に～」	三-第17	主君の情少けれハ、大事の詮に用立ぬ事
二-19	「ハ 夫、大将と成て、國都をきつて取べき事～」	三-第18	天命つきたる國を打とるべき事
二-20	「むかし唐の逆皇と申賢人、毎日、明事、ものゝ本～」	三-第19	書籍をよむハ聖賢を友とすと云支 ※評無し
二-21	「むかしさる所に、十二三ばかりいへる賢人、ミな、人に～」	三-第20	三人の童もの語の事
二-22	「むかし平安城姉が小路の真中ほどに、彦八とて～」	三-第21	福人をうらたミたる狂哥の事 ※評無し
二-23	「昔去人の云るハ諸侍の心得べき事、うそをつくまじき」	三-第22	諸侍、つねに心得べき事
二-24	「むかしさる人の云るハおやのかたき、うつべき事～」	四-第1	親の敵うつべき事
二-25	「むかし唐の宋文公といへる賢人、ミな、人に～」	四-第2	朱文公、学文をすゝめられし事
二-26	「むかしさる人の云るハされば、人の口ハ一切善悪～」	四-第3	人の口ハ善悪の門戸なる事
二-27	「ハ 狂人はしれば、ふ狂人もはるといへる禪語あり」	四-第4	万事、分際に相応して行へべき事
二-28	「ハ 讒言へうりと云物ハ、おそろしき物かな」	四-第5	讒言の事、付聖曆九月十三夜の詩の事
二-29	「ハ さる時、さる人の長屋のまへを通るに(りし)～」	四-第6	石に蹴つまづきたる人、秀句返答の事 ※評無し
二-30	「ハ 人の主君としてハ、少なりとも、忠功あらん」	四-第7	少の忠ありとも、恩賞を給ハるべき事
二-31	「むかし雪のおもしろきに、いざなはれて～」	四-第8	入徳門のまへにして詩をつくりし事 ※評無し
二-32	「ハ 越後の國がだう峠のふもとに、天狗坊とて～」	四-第9	富貴に成やうをならひし事
二-33	「むかしさる人の云るハひろく世間を、見きよおよび候」	四-第10	利欲ふかきと、きさだてなる人の事
二-34	「むかしもろこし宋國のあるじ、精玉と申ハ、行儀～」	四-第11	玉口無当といふ事
二-35	「むかしさる人の云るハ人として、じひの心なくんは～」	四-第12	慈悲に大小ある事
二-36	「むかしさる大名の、鷹すかせらるゝ、大なる小なる～」		

二一-37	「むかしさる人の云るハ盗人にも、さまゝあり」	四一第13	ぬす友に、さまゝ あることゝ
二一-38	「〃 さふらひハ、たゞ武士道をたしなミ、剛なる心がけ」	四一第14	無常を觀して、臆病をさますへき事
二一-39	「むかしもろこし楚の項羽と云る大将ハ、おそろしく〜」	四一第15	項羽の物惜ミ深かりし事
二一-40	「むかしさる人の云るハ人間、万事、師匠といふ物〜」	四一第16	万事に師匠ある事
二一-41	「むかしさる人の子、七八歳のころでならひをせよとて」	四一第17	少年より武藝をつとむへき事
二一-42	「むかしさる人の云るハ当世の主君達、諸卒人を〜」	四一第18	侍の剛臆ハ軍將の心による事
二一-43	「〃 当世の主君たち、よきさふらひ斗をと、えらミ〜」	四一第19	名將ハ人はずてず付孟嘗君が事
二一-44	「〃 侍の花車なると云ハ、行儀よく、正じきにして〜」	四一第20	侍ハ心だて、万事やさしかるへき事
二一-45	「むかし大江の文平といへる人、あるかひもなく〜」	四一第21	貧病をいやす葉の事
二一-46	「むかしさる人の云るハ人に、物をくれながらも、わるく」	四一第22	人に物をとらするに、分別ある事 ※評無し
二一-47	「〃 人間におみて、礼儀を肝要と心得べし」	四一第23	人は礼儀を肝要とすへき事
二一-48	「〃 織田の信長公、羽柴秀吉公のときよりこのかた」	四一第24	喧嘩口論の旋の事
三二-1	「〃 それ、人の主君として、其國所をにぎハし〜」	五一第1	國郡、繁昌さすべき子細の事
三二-2	「むかしさる人のいへるハ諸大名の宝物とて、常に〜」	五一第2	諸大名の宝ハ諸侍なる事
三二-3	「〃 世間、にくきに、あまりある物ゝ」	五一第3	世間に、にくき物ある事
三二-4	「むかし愚癡、機嫌のよき時分、かたられけるハ、それ」	五一第4	一生涯、心得の事
三二-5	「むかしさる人の云るハ当世の人〃、貴賤老若男女〜」	五一第5	心の鏡を、くもらしける事
三二-6	「むかし日蓮宗のお上人、だんなのつまに、うちほれて」	五一第6	日蓮宗の法師、悪喜の狂喜の事 ※評無し
三二-7	「むかしさる人のいへるハ女房をむかへるか、又〜」	五一第7	女房をもつに、七去三不去ある事
三二-8	「〃 こなたかなたの家〃を、わたりある(り)きて〜」	五一第8	下つがたハ、上の好ミにしたがふ事
三二-9	「むかしさる人の云るハ小隠ハ、りくさうにかくれ〜」	五一第9	大隠小隠の事
三二-10	「むかしもろこしに、九千歳を経て、長命なりし東方朔」	五一第10	人にハ盛衰ある事
三二-11	「むかしさる人、九月のなかにばに、あましき〜」	五一第11	酒醜を感ずる事
三二-12	「むかしさる人のいへるハ人に、いけんを、いハんに〜」	五一第12	人に異見すべき様の事
三二-13	「むかしつれゝと、ふりくらしたる、あま夜の〜」	五一第13	物ごとに心得有へき事
三二-14	「むかしさる人の末の子、殊外りこなる、ありけり」	五一第14	学問のもとを、あやまりたる事
三二-15	「むかしもろこし後漢の司馬德操といへる、名譽の人」	五一第15	司馬德操が事
三二-16	「むかしさる人の云るハそれ、道心あらん人ハ、一東」	五一第16	道心者ハ物を貯まじき事
三二-17	「〃 たうど天竺、かうらひ、なんばんその外〜」	五一第17	無用の物はなくとももの事
三二-18	「むかしさる老功の人の云るハ合戦の時、馬上にて〜」	五一第18	軍陣の時、心得へき事
三二-19	「むかしさる人の云るハかの大悪逆人こそ、此ほとハ」	五一第19	悪逆人を虎狼にたとへし事
三二-20	「〃 人をころすべき其理、もつともならは、千万人を」	五一第20	人を殺すハ非業なる事
三二-21	「〃 いかに、孝行をするとも、おやの跡を取度思ひ〜」	五一第21	忠孝、学道の心ざしる事
三二-22	「〃 かへすゝ、諸侍の、卒人となりて、すりきり〜」	五一第22	奉公をかせぐにハ、其家の善悪をみるへき事
三二-23	「〃 人をふるまひ申に、其しなおほしといへども〜」	五一第23	人をふるまふべきしなゝの事 ※評無し
三二-24	「〃 もろこし魏といへる國の里人、山田をかへす時」	五一第24	宝の玉を知と知ざるとの事
三二-25	「むかし弘法大師、諸國を修行有しに〜」	五一第25	磨針の物かたりの事
三二-26	「むかしさる人二人、あらそへる事あり」	六一第1	学問ハ仕やすく、得道ハしがたき事
三二-27	「むかしさる人の云るハ人ハ、たゞ学文において〜」	六一第2	学問して、本心の玉を、ミがくべき事
三二-28	「むかし古つハもの、独の子をもつ、其年十四五より」	六一第3	我子に、武運の一言を、しめしける事
三二-29	「〃 水無月の、むしゝと、あつがハしきときしも」	六一第4	長老と旦那と、極楽の狂喜の事 ※評無し
三二-30	「〃 さる獵師、おく山へ、かりしに行侍りけるに〜」	六一第5	論ずる物を中よりとる事
三二-31	「むかしさる人の、いへる事あり、それさふらひとならハ」	六一第6	傾城ぐるひをいましむる事
三二-32	「むかしさる人の云るハそれ、人の主君としては〜」	六一第7	万事、過たるハ及はずといふ事
三二-33	「〃 他國へ行候ハ、まづ、その國所の掟法度を〜」	六一第8	他國にゆきては、其國法を尋知へき事
三二-34	「〃 人の前にて、はなしをせんと思ひ候ハ、まづ〜」	六一第9	寄物語心得の事
三二-35	「むかしさる國に、金銀米銭ふ足なく、心正直にして〜」	六一第10	武士の真似する町人の事
三二-36	「むかしよき人〃の寄合をみるに、いかにも〜」	六一第11	善人、あしき人の、つき合の跡の事
三二-37	「むかしさる人の云るハ貴賤老若男女ともに、金銀〜」	六一第12	金銀をもちても、もたむ跡する人の事
三二-38	「〃 今時の人〃、あれハ、りはつ才實利口分別ある」	六一第13	輕薄表裡をいふ侍の事
三二-39	「〃 甲州武田信玄公の御さきてを、仕られたる〜」	六一第14	平野久助、武道にはづれたる事
三二-40	「〃 夫、侍に、上剛下剛と云あり」	六一第15	上剛下剛といふ事
三二-41	「〃 それ、よき主君と申ハ、仁義をさきとして〜」	六一第16	よき主君、あしき主君の事
三二-42	「〃 つくゝと、世間の貧福をあんずるに、彼貧福と〜」	六一第17	愚人ハ富貴に、才覚人のすり切吏
四一-1	「〃 たまゝ、思ひよりたる折ふし、学文をもせバや〜」	七一第1	学問者の富貴をへつらふ事
四一-2	「〃 ある時、琥珀といふ玉の塵をすひとるが〜」	七一第2	琥珀磁石の事
四一-3	「むかしさる人の云るハわか身、則、仏なるべし」	七一第3	本来の心法悟道の事
四一-4	「むかしさる人の云るハ世上、愚妄どうよく人の申分〜」	七一第4	学問すれば、わる意地になるといふ事
四一-5	「〃 当世の仏者儒者を、うがゞひ見聞に、仏者の〜」	七一第5	佛の二道たがひに誹合事
四一-6	「むかしさる老功の云るハ合戦に、吉日の良辰を〜」	七一第6	軍陣の時心得の事
四一-7	「むかしさる人の云るハ学文ハ、至て大事の物かな」	七一第7	書籍の義理をあし心得たる事
四一-8	「むかし弥生の、のどかなる花のさかりに〜」	七一第8	花のもとにて喜よみし事 ※評無し
四一-9	「むかしさる人の云るハ目口耳鼻手足、此六根の正〜」	七一第9	人の六根善にしたがふへき事
四一-10	「むかしさる人、さる時、こつげんと来りて、それがしに」	七一第10	ある人、此書の作者に異見の事
四一-11	「〃 有て、たつとき出家へまいり、参得の望を〜」	七一第11	文盲なる者、参得を望む事
四一-12	「むかしもろこしの柳原といへる、かたはら町の橋を」	七一第12	老母に孝あるを感じける事
四一-13	「むかし老功の人の物語に」	七一第13	はしり者を、うちとむべき心得の事
四一-14	「むかしさる人の云るハそれ、主君としてハ、威光〜」	七一第14	主君ハ威をおもくすべき事
四一-15	「むかしもろこし(に)あつてのせいし、といへる美人〜」	七一第15	心だてハ、よき人の真似すべき事 ※評無し
四一-16	「むかしさる人の云るハ鎌倉の最明寺時頼公〜」	七一第16	西明寺殿、最勝園寺殿、御修行の事
四一-17	「むかしさる人のいへるハ最明寺時頼公、御つれゝの」	七一第17	最明寺殿の事 ※評無し
四一-18	「むかし三州牛窪の住人、山本勘介とて覺の武士あり」	七一第18	山本勘介、甲陽に属せし事
四一-19	「むかしもろこしの梁と云る國に、宋就と申人あり」	七一第19	佛の宋就、隣國を和せし事
四一-20	「むかしミちのくの、かたはらに、仁儀にたつし給へる」	七一第20	花の牛介、私欲の狂喜の事 ※評無し
四一-21	「むかしさる人の云るハされバ、人の親とならば〜」	七一第21	子を生立る心得の事
四一-22	「〃 扱も、さる人の結講よ、利発を内にこめて〜」	八一第1	人をほめ過す事
四一-23	「〃 人めしのぶの浦と、なおもひそ、蟻のかる〜」	八一第2	万事つとむべき事
四一-24	「〃 出家と成てハ、かならず古郷を立さして、他國に」	八一第3	出家ハ故郷をはなるへき事
四一-25	「むかし上方お大名のお家に、まかり有候時〜」	八一第4	此書の作者、人をなぶり返したる事
四一-26	「むかしもろこしの韓退之といへる文人の詩に〜」	八一第5	韓退之が詩を、意に合せ感ずる事 ※評無し
四一-27	「むかしさる人のいへるハ当世の医者衆を、うがゞひ」	八一第6	当世の医者の心ざし、きたなき事
四一-28	「むかしさる人の云るハ今時の人〃、病におかされ〜」	八一第7	病人医者頼む心得わろき事
四一-29	「むかし神無月十日ありの、くれつがた、武州柳原と」	八一第8	藤原して閑なる跡を感ずる事 ※評無し
四一-30	「むかしもろこし、漢の文帝の御代に、一日に千里を」	八一第9	漢文帝龍馬を返し給ふ事
四一-31	「むかしさる人の云るハげらうの詞に」	八一第10	曲て徳用有物の事

四-32	「世を、ひろく見、きよなれぬ、人」の行儀さほう」	八-第11	蟬蛙朝菌の事
四-33	「ある時、かた山のべを、とをしりに、鳩と〜」	八-第12	我悪を知て人を怨る事
四-34	「当世の、人の主君の御口くせとして、よき内の者」	八-第13	伯楽馬を知と云事
四-35	「上のよき人といふハ、善事を見きいて(ハ)〜」	八-第14	人に三段ある事
四-36	「むかし中秋の比なるに、下谷といふ所を過て〜」	八-第15	仏前を見て其馬を見かぎりし事
四-37	「むかしさる人の云るハ近代を、ミきくに、いづれの〜」	八-第16	横目衆の事
四-38	「むかしさる時さる所にて、さる人、はいかいの章句を」	八-第17	聯句の對をいたせし支 ※評無し
四-39	「むかしさる人のいへるハされば、ひかりある物ハ〜」	八-第18	同類相友なふ支
四-40	「むかしさる人の云るハ水に四見あり、と云て、天人ハ」	八-第19	水に四見三味の不同有事
四-41	「神をいのるにハ、髪をあらひ、身をきよめ〜」	八-第20	いのるにしろしなきハ、信心浅きゆへの事
四-42	「悟れる人の心といふハ、たゞ、おつしの夢を見て」		
四-43	「元弘三年の比、新田左中将義貞公と〜」	八-第21	龍窟よし助龍城真見の事 ※評無し
四-44	「むかしさる人のいへるハ大事の合戦にハ、糧をすて」	八-第22	大事の合戦にハ、ろう城詮なき事
四-45	「むかしさる人の云るハいにしへの、弁のめのと〜」	八-第23	弁のめのとが毒の支 ※評無し
四-46	「鬚鬚といふ鳥ハ言あざやかに、よく物をいふ」	八-第24	愚悪の人ハ鳥獸に同じき事
四-47	「今時の人ハ、学文するをみるに、よるひるを〜」	八-第25	学文に根の透め支
四-48	「むかしもろこしの蘇韶と云る人、病にあたりて〜」	八-第26	蘇韶死して後、人に逢たる事
四-49	「むかしさる時、愚親の申きかせらるゝハ、運ハ〜」	八-第27	運ハ天にありといふ事
四-50	「むかしさる用ありて、武州江戸の日本橋を〜」	八-第28	愚をみるハ猶愚なる事
四-51	「むかしさる人の云るハ物を、よく知たる人ハ〜」	八-第29	万事にほこるへからさる事
四-52	「むかし鉄山禪師といへる出家の詩に〜」	八-第30	恋慕の詩をもつて、無常を觀せしむる支 ※評無し
五-1	「むかしさる人のいへるハ新田左中将義貞公の、仰を」	九-第1	大将たる人、心持の事
五-2	「むかしもろこし、秦の国の李斯といへるハ、利発才覚」	九-第2	秦の李斯が事
五-3	「むかしさる人の云るハ万、あやまりと思ふ事をば〜」	九-第3	過ハ少成時、可愼支
五-4	「むかしから國に、道林といへる、たつとき僧あり」	九-第4	出家に似合め所行の事
五-5	「むかしさる人の云るハ久しく、知音を念比したる〜」	九-第5	世の賢になる事
五-6	「わかかりし時に、狐や、うを、おほく、つりたり」	九-第6	利欲ゆへ後悔する支
五-7	「むかしさる人、去ものに対して、いけんを申けるハ〜」	九-第7	異見をせば、其人の心ざしを知へき事
五-8	「むかしさる人の云るハ当世の出家ハ、何として〜」	九-第8	下賤の出家に成たるハ、心だていやしき事
五-9	「むかし中納言藤原卿といへる人、後醍醐天皇に〜」	九-第9	藤原卿運世の支 ※評無し
五-10	「むかしさる坊主、わかき女を、めしつかはれけり」	九-第10	寺に女を召つかふ事 ※評無し
五-11	「むかしさる人の云るハ鹿を追獵師ハ山をミず〜」	九-第11	鹿を逐獵師の事
五-12	「若狭の國小濱と申所に、酒やあり」	九-第12	人くらひ犬の喩の事
五-13	「さる人の破風の紋に、猿を三疋、作りつけたり」	九-第13	三申の願立の支
五-14	「人の一つくせハ、ある物なり」	九-第14	人に癖ある事
五-15	「賢をバ、賢をもつて求め、賤をハ、賤をもつて〜」	九-第15	賢ハ賢をもつて求めよ、といふ事
五-16	「むかしさる所に、貧なる人の、暮をこのむあり」	九-第16	暮をすく人の支 ※評無し
五-17	「むかしさる人の云るハ世間の人ハ、すきこのミ〜」	九-第17	益なき物を嗜む事
五-18	「今時、世間にて、あの人ハ、万事へつらひなきと」	九-第18	表裡各別の人の事
五-19	「諸侍の善悪を、見しらん事ハ、何よりもつて〜」	九-第19	侍の善悪を見知事
五-20	「むかしそれがし、ためしよるひを、おどし候はんとして」	九-第20	千安合戦物語の支
五-21	「むかしもろこしに、大公望と申大賢人有」	九-第21	太公望が事
五-22	「むかしさる人の云るハ人ハ、たゞ、友たちこそ〜」	九-第22	相口の友の事
五-23	「つくゞと、世間を、うかゞひ、友なハんとすに〜」	九-第23	可 親友なき事
五-24	「仏道諸法の、空と云ハ、一念不生の空無染の心」	九-第24	空理の事
五-25	「むかし天竺の勝軍、論師といへる人ハ、内典外典の」	九-第25	愿に身をつながらゝ支
五-26	「むかしさる人の云るハたれども、人として、よくを〜」	九-第26	買切の漢葉の支 ※評無し
五-27	「奉公の心得と云ハ、いかにもして、主君の御氣」	九-第27	奉公人の心得の事
五-28	「たうざハ、身のため、めいわくなるやうなれども」	九-第28	後に身爲に成事 ※評無し
五-29	「いにしへの侍ハ、拾能七藝などならふと〜」	九-第29	乱舞を好過したる事
五-30	「むかし名大将と、きこえしほどの主君ハ、城郭を〜」	九-第30	名大将城(つちへんに郭)をかまへさる事
五-31	「むかし甲陽に、大酒をのむものあり」	九-第31	奇病の支
五-32	「むかしそれがしのおや、申されけるハ〜」	九-第32	世に住心得の支
五-33	「むかしさる人の云るハ侍と生れ出たらん人ハ〜」	九-第33	心操可 嗜支
五-34	「むかしすみなれし人の、なきあとばかり、物かなしき」	九-第34	駿河の城に寄詩の事
五-35	「むかしさる人の云るハ当代いづれの家の、侍の物語」	九-第35	主君をそしる侍の事
五-36	「当世のわかき侍に武士道を吟味し、剛なる〜」	九-第36	よき侍の事
五-37	「つくゞと、うき世の人ハを、みるに、よき人の〜」	九-第37	我ハ悪て他人に異見する事
五-38	「それ、聖人の、さだめをかせ給ふごとく、万事〜」	九-第38	時を知といふ事
五-39	「むかしさる人、友だちの、ひとり子の、もてる〜」	九-第39	小児の賢才を感ずる支 ※評無し
五-40	「むかしさる人の云るハ唐國の名大将たちハ〜」	九-第40	異國の軍仕様の支
五-41	「いづれの御時、いかなる人や、いひたりけん」	九-第41	主君家老出頭を、物に喩し事
五-42	「取こもりのものあらハ、あはて、人さきに〜」	九-第42	取籠を可打心得の事
五-43	「むかしさるかたへ参りたれば、名所の露といへる題」	九-第43	寄 名所 露の哥の支
五-44	「むかしさる人の云るハけだものがりして、身命を送る」	十一-第1	忠功有て謀を敷事
五-45	「万の物を見聞、時に、其物を、つくゞと、ミき〜」	十一-第2	万事に心ハ事易き支 ※評無し
五-46	「むかしそれがし、賢大井右近と申者、折ふしに〜」	十一-第3	軍立心得の事
五-47	「むかしもろこしの陳弘章といへる賢人の、云るハ〜」	十一-第4	方に、よき程らひあるべき事
五-48	「むかしさる人の云るハ人間において、時理の二つを」	十一-第5	万事後を可思事
五-49	「むかしもろこし、鄆の國の貧者、雨ふる時に〜」	十一-第6	鄆の貧者の事
五-50	「むかし濟家の衆僧と、くまの山かけ出の山ぶしと」	十一-第7	濟家僧と山ぶしと、いさかひの事 ※評無し
五-51	「むかしさる人の云るハ侍として、金銀を、ほしく〜」	十一-第8	大名ハ摺切てよき支
五-52	「むかし九州おほちの御前と申、ミまそがりけり」	十一-第9	大内御前哥の事 ※評無し
五-53	「むかしもろこしに、ゆれり、といへる人ありて〜」	十一-第10	庾亮が馬の事
五-54	「むかしさる人の云るハ軍法といふ物ハ、合戦の時〜」	十一-第11	軍法ハ常に有事
五-55	「むかしさる人、手を合(せ)南無大慈大悲のお天道」	十一-第12	万事天道成支
五-56	「むかしさる人の云るハ慈悲の心ざしあらん事は〜」	十一-第13	慈悲ハ人に依てすべき支
五-72	「むかしさる人のをしへに、日侍と生れてハ、弓馬の〜」	十一-第29	博奕八法の事
五-73	「むかしさる人の云るハそも、世中の人の、心と心とを」	十一-第30	心と心をとど替たき事
五-74	「むかしもろこし、東坡といへる詩人鳥とらはれて〜」	十一-第31	東坡が語の支
五-75	「むかしさる人の云るハそれ、万の物を、かハゆ〜」	十一-第32	物を愛する心得の支
五-76	「仁義の勇者、血氣の勇者とて、侍の心〜」	十一-第33	勇者二種の事
五-77	「名大将の、陣をとり、人数をつかひ、武略略〜」	十一-第34	軍法ハ善得謀の如成事 ※評無し
五-78	「世間にて、利発利口の主君にておハします、と〜」	十一-第35	世智を猿に喩支
五-57	「むかし白井銀介といへる、名譽の馬乗あり」	十一-第14	大事丸狂哥の事 ※評無し
五-58	「むかし陶淵明と云る人、菊を愛して、うへけるとぞ」	十一-第15	陶淵明が文の事

五-59	「むかしさる人の云るハ侍たる者ハ、用心が、かんよう」	十一第16	物毎可用心事
五-60	「むかし吉田の兼好の詞に物により、おほくありて～」	十一第17	多有てあしき物の事
五-61	「むかしさる人の物かたりに人となりてハ、かならず～」	十一第18	侍の可嗜支 ※評無し
五-62	「むかしある人の云るハ諸侍の、心かくべき事」	十一第19	侍の行儀の事 ※評無し
五-63	「むかしある人の云けるハ家にありたき物ハ～」	十一第20	有度物の支
五-64	「むかしの人の云るハ京いなかに、かきらず～」	十一第21	よからぬ人の躰の事
五-65	「むかしさる人の云けるハそれ、天下において～」	十一第22	法度の字心の事
五-66	「むかしある人のいへるやうハそれ、人の主君としては」	十一第23	相当に人を可使支
五-67	「むかしさる人の云るハ当世、上下の人」、老たるも」	十一第24	学文心さすへき事
五-68	「むかし紫野の一休和尚、いまた順藏主と申せし時」	十一第25	一休の秀句答の事 ※評無し
五-69	「むかしある人の云るハ良薬口ににがく、忠言口にに～」	十一第26	良薬口に苦と云支
五-70	「むかし武州霞の関ちかき所にて、初春の比ほひ～」	十一第27	遠歌発句の事 ※評無し
五-71	「むかしそれがしの親、つねに語て、きかせられけるハ」	十一第28	初陣心がけの事
五-79	「むかしさる人のいへるハ物を知たる人にも～」	十一第36	物知に邪正ある事 ※評無し
五-80	「むかしもろこし、韓信といへる人ハ、王孫にて～」	十一第37	韓信が支 ※評無し
五-81	「むかしさる人の云るハいづれの御家の老出頭人も～」	十一第38	諸侍を目利すへき事
五-82	「〃 世に物うきものハ、傘人となれる侍成(たる)べし」	十一第39	傘人ぜんさくの事
五-83	「むかしさる人の云るハ女にハ、五障三従とて～」	十一第40	女の一生涯の事
五-84	「〃 茶の湯に、すかせらるゝ主君たち、茶入茶碗～」	十一第41	侍にも堀出有へき支 ※評無し
五-85	「むかしもろこしに、めでたき、ミかと、おハします」	十一第42	郭隗が事
五-86	「昔さる人の云るハいづれの御家の老出頭衆を～」	十一第43	家老の心持の支
五-87	「むかしさる人の云るハ万のさうし物語をみるに～」	十一第44	同様をいく所にも書事
五-88	「むかしさる時、親子ともに、傘人いたし、越後の～」	十一第45	扇屋の支 ※評無し
五-89	「むかしさる人の云るハつくと、世間諸侍の上を～」	十一第46	不氣根の支
五-90	「〃 是から、かうゝ、北にあたつて十萬石ほどの主君」	十一第47	或大名の詞の支